

モノグラフ

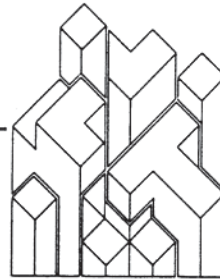
中学生の世界

vol.12

©1982. 株式会社 福武書店 教育研究所 / 加藤智博・賀川雅子・木村美紀子
東京学芸大学助教授 深谷和子・千葉県教育センター所員 高橋美恵

中学生の自己像

～スモール・イズ・ビューティフル～



目次

特集 ● かけがえのない自分	2
調査レポート ● 中学生の自己像	
本報告書の要約	5
第Ⅰ章 自己像—今ある姿	
1. 現実の自分	7
2. 自己評価と他者からの評価のズレ	9
3. こうありたい自分	10
4. 自己像と学業成績	13
第Ⅱ章 子どもたちの現在と過去	
1. 今、打ち込んでいるもの	15
2. 学校生活と友だち	18
3. 生徒たちの「自分史」	21
第Ⅲ章 自己像—未来とのかかわりで	
1. 自分に向いている仕事	29
2. 自己像の構造	29
3. 本当はどう生きたいか	36
4. 自分の将来展望	38
まとめに代えて	42
調査票見本	43
集計表	55



特集

かけがえのない自分

東京学芸大学助教授 深谷和子



「自尊感情」の発達と非行

最近の青少年非行の急増ぶりには、ただならぬものがあると言われる。

青少年の非行は、戦後三つの波を経験したとされる。第1のピークはサンフランシスコ条約の年、昭和26年。まだ食べ物も着る物も住むところもなく、国中が貧しさと闘っていた頃である。生活苦のための非行、貧しさ故の非行が急増して作り上げたピークと言え

るだろう。第2のピークはオリンピックの年、昭和39年であった。そして第3のピークは現在。しかし、恐ろしいことに、過去の二つのピークより、第3の波ははるかに大きくて、しかも正確にはまだピークと言えるような下降傾向を示していない。山登りの最中のような状況なのである。この先、一体どうなっていくのか。ある意味では、現在、国を挙げて

のおとなたちの心配の種とも言えるだろう。

非行グループの中に入り込んでしまった子どもたちに、臨床的な面接をしてみると、一つの特徴が浮かび上がってくる。彼らの多くが、いわゆる「かけがえのない自分」という自己像を持っていないかのように思える点だ。

俗に「自分ほどかわいいものはない」との言い方がある。この場合は、とすればエゴイスティックになりやすい人間の心を指しての表現だから、ニュアンスに少しのズレもある。しかし「自分ほどかわいいものはない」と思う気持ちがあれば、非行の道へ入り込むことは大幅に減ってくるだろう。

また臨床心理の用語に、「自尊感情」という言葉がある。自分を肯定する感情。自分を好きだ—またはそれほど嫌いではない—という感情。自分の中に欠点はあっても長所もあって、生きていくことが、自分にとってもそれなりに意味があると思える状態。自分がまわりの何人かの人々にとって、ささやかながら喜ばれる存在であるという自信。—したがって「かけがえのない大切な自分」と自分を受け止められること。それが「自尊感情」の正体と言っていいだろう。

私たちが、たとえばスーパーマーケットへ行行って、誰も店員が見ていない、100%万引きが成功すると思っても、決してガムやチョコレートポケットにしまい込んだりしないのは、そうした不正行為をする自分、というイメージが自分の中に育つことがいやだからなのだろう。このように、たいていの人間の中には、自分を汚くしたくない、傷つけたくない、という気持ちがある。つまり、「自尊感情」に支えられて、おぼつかない足どりながら、道をふみはずさずに人生を歩いて行くことができるのだろう。

ところが非行の道に入りかけた子どもたちには、「自尊感情」が育っていない。崩れて輪郭のはっきりしない自己像がある、とでも表現できようか。

『モノグラフ・中学生の世界』に「vol.4 非行文化をめぐる」がある。その中で見い出された非行予備軍（自分を「非行化するかも知れない」ととらえている子どもたち）の特徴として

- ① 成績が悪い
- ② 家庭や学校がつまらない
- ③ おとな社会に不満がある
- ④ 流行に敏感

のような条件が指摘されていた。

この中で「成績が悪い」という条件が大きな比重を占めるのは、低い成績評価が、成績の中だけにとどまらず、「つまらない自分、価値のない自分」のように自分に対する全体的な低い評価を生み出してしまうためであろう。本当なら人間の価値は、成績というたった1本のものさしで測って決めてしまえるようなものではないはずだ。何十本、何百本のものさしをあてがって、その度に違う数字がでてくる自分。高い数値もあれば低い数値もある。デコボコで陰影に富むおもしろい多面体—それが人間なのだと思う。しかし現代のわが国ではどうしても「成績」だけが、わがもの顔で歩いてしまう。だから学業が不振ぎみの子どもは、自尊感情を持ちにくいという結果になってしまう。成績の悪い子が非行化しやすいというのは、別に頭が悪くて善悪の判断ができないとか—そんなことではなくて、「かけがえのない自分」という感情を持ちにくいことによるものなのだろう。

子どもの明日を開く母親、先生

そしてさらに彼らの「自尊感情」の低さにはもう一つの原因が考えられる。学校と家庭への適応の問題である。

自尊感情はどうやって育てられるのか。むしろ自分一人でそれをかくむ面もないわけではない。しかし基本的な部分には、その人を見る周囲のまなざしがある。周囲の人々がその人を価値のある、魅力的な、自分にとってかけがえのない大切な存在だ、と見て見つめていけば、彼は自分に注がれるまなざしのやさしさから、自分をそうした価値ある存在と受け止めるであろう。他人にとって必要とされている存在、すなわち「かけがえのない自分」の感情である。

すでに指摘した非行子備軍とでも言えそうな子どもたちが「家庭や学校をつまらない」と感じている気持ちは、おそらく周囲の人々から暖かく受け入れられている、という感じが持てないことを示すのだろう。周囲から「大切に思われていない、信頼されていない、いい子(いい仲間)だと思われていない」という不幸な感情が、家庭や学校をつまらないと思わせているのだろう。つまり彼らの自尊感情は、どう見てもうまく形成されているとは言いがたいようである。

そこから生まれてくる漠然とした不満、心の不安定さ、それが「おとなの社会に不満がある」と彼らに言わせる結果になるのだろう。自分が大切にされていないことからくるいらだちである。そして生まれてくる「流行」への関心。少しでも先端を行く、ナウい服装や言葉使いをして、せめて周囲の人々から注目してもらいたい、カッコイイと評価してもらいたい。それがせめてもの彼らの努力なのであろう。

考えてみるとこの「自尊感情」を十分に発達させることの大切さは、非行とのかかわりでだけ生まれてくるわけではない。現代の不安の多い社会に生きるおとなも子どもも、すべての者の中にしっかりと確立されているものでなければならぬだろう。

では子どもたちの一人ひとりに「かけがえのない自分」という自己像を作り出させるにはどうしたらいいか。それにはまず、一人でも多くの、しかも彼らにとって重要で意味のある「他者」が、「あなたはすばらしい」「自分にとって大切な存在」「あなたの側にいることは自分にとっての喜び」というまなざしを注いでやることだ。

その第1は母親であろう。昔の素朴で限りなく暖かかった母親がわが子に注いだまなざしをもう一度子どもの上に取りもどすことだ。母親にとってすら「成績のよさ」がわが子の価値にかかわってきているという不幸な時代。しかしたとえ世界中の者が、その子を「おまえはダメな奴だ」と指さしたとしても、母親だけは唯一、子どもの側で、「いいえ、私の子どもはすばらしい」と胸を張って言うことができるようになりたいものである。

そして担任の先生。40人の一人ひとりに、母親に似た暖かく大きく深いまなざしを注いでほしい。そうすれば、その学級の子どもたちもまた、お互いにお互いをそうした目で見つめ合うに違いない。それがまた一人ひとりに、ゆるぎない自尊感情を育てる結果をもたらすだろう。

こうしたことでわれわれは、もしかしら考えられないほど大きな明日を、子どもたちに開いてやれるかもしれないのである。

調査レポート ● 中学生の自己像

東京学芸大学助教授 深谷和子

千葉県教育センター所員 高橋美恵

本報告書の要約

このレポート「中学生の自己像」は、『モノグラフ・中学生の世界 vol.8 女子中学生—その心の傾斜—』の姉妹編とも言うべきものである。「女子中学生」のレポートの中でわれわれは、なぜか現代の女の子たちが、人生の戦い半ばにして、すでに将来に向けての高い達成からオリてしまっている様子を、数字の上で目のあたりにした。しかし、このことは女子中学生だけでなく、男子中学生についても、ある程度あてはまりそうな気配であった。それはなぜなのか。おそらくそこには彼らの「自己像」の問題がかかわってきているのではないかと、われわれは考えた。一体、現代の中学生にどんな自己形成がなされつつあるのか。その中にはどんな問題がひそむのか。そこがこの調査を企図した背景と言えるだろう。

① 調査テーマ

既刊『モノグラフ・中学生の世界 vol.8 女子中学生—その心の傾斜—』で見い出された「オリかけている子どもたち」の姿に関連させて、彼らの自己像にさまざまな角度から接近し、分析して、かつその問題点を探ろうとする。

② 調査対象

東京、岡山、秋田にある三つの中学校の1、2年生合計1,311人に、昭和57年2月、学校と

おしのアンケート調査で行われた。

サンプル数

(人)

性別 学年	男子	女子
1年	364	334
2年	318	295
計	682	629

③ 自分に否定的な中学生たち

生徒たちの抱く自己像は、全体に自信のない、否定的なものであった。とくに、学力・容貌に関する評価は厳しく、性格的な明るさなどの項目でやや肯定的といった傾向を見せた。(P.8 図1)

④ 担任の先生との遠い距離

身近な他者の中で、自分にもっともネガティブな評価をしているのが担任の先生、もっともポジティブな評価をしてくれているのが親であると、生徒たちは考えている。(P.10 図2)

⑤ 成績と自己像の結びつき

成績上位群は十分に発達した自尊感情を持

ち、下位群は「オリエてしまった子」のイメージを持つ自己像を持っている。(P.14 図5)

⑥ 「学校が楽しい」者は半数を超える

生徒たちは、現在の学校生活を肯定的に受け止めており、ほぼ9割がまあなんとか適応しているらしい。思ったより学校の規則にも従順である。(P.19 図10、P.20 図11)

⑦ 自分が非行化する可能性を感じる者は26%

校内暴力がひょっとすると自分の学校で起こるかもしれないと思っている者は69%。自分はどんなことがあっても絶対非行化しない自信を持つ者はわずか28%である。(P.19 図9)

⑧ 成績がだんだん悪くなる者は15%

小学1・2年から、小学5・6年、現在を通算してみると、成績上昇群は9%、不変群44%、下降群15%、その他32%で、中では、成績下降群の自己像が、一番暗い。(P.25 表2、P.26 表3、P.27 表4)

⑨ 小さい自己像

生徒の自己像は「易しく責任がなくて、決められたとおりやればいい9時5時の仕事」に向いている自分、という姿に近い。(P.29 表5)

⑩ 男子は技術者型、女子はサービス型

自己像を「どんな仕事に向く自分か」の観点で分析してみると、「人(大勢の)とかかわる一物とかかわる」「知識・技術の必要な(難しい)―誰にでもできる(易しい)」の二つの軸で区切られた四つのタイプが見い出される。このタイプのうち、男子は主として「技術者型」、女子は「サービス型」の仕事に向くイメージを持っている。(P.33 図17、P.34 図18、図19)

⑪ 尊敬する人を持たない生徒たち

尊敬する人がいないと答えた者は全体の54%にもものぼる。人名を挙げさせても、きわだった英雄やスターがまったく見あたらないのが特徴である。(P.38 図23)

提言

中学生たちに健康な自尊感情を育て、自己像をより積極的で肯定的なものとし、かつ明るく具体的な将来展望で築かせるために、われわれはできる限り、生徒たちを援助する必要がある。そのためには、生徒たちに、勉強

以外にもあらゆる種類の活動や生活体験等を経験させ、日々新しい自分、学業成績以外にも多くの領域に能力のある自分、他人に役立ち喜ばすことのできる力を持った自分――といった自己像を作り出させることであろう。

第I章 自己像——今ある姿



1. 現実の自分

ネガティブな自己像

幸せだった子ども時代に別れを告げて「自己探索」への旅を始めた中学生たち。彼らにとって「自分」とは、どのようなものなのか。まずスタイルや容貌、勉強や運動の能力、性格などに関する23のアイテムを手がかりに、生徒たちの自己イメージを探ってみよう。

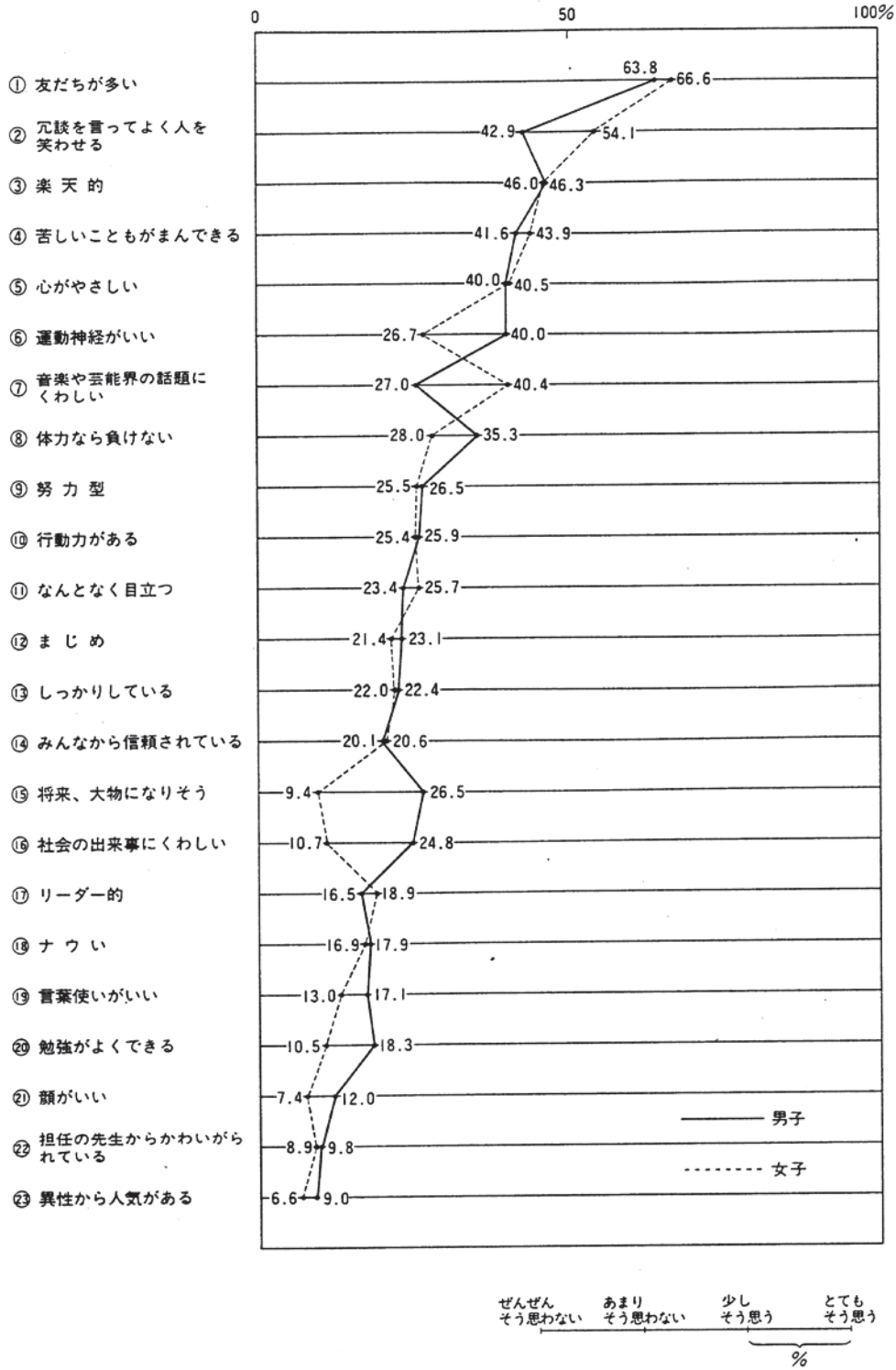
図1は、それぞれのアイテムについて、「とてもそう思う」から、「ぜんぜんそう思わない」までの4段階の評価を求め、男女別にそのプロフィールを図示したものである。全体として肯定率の高かった項目から順に並べてある

が、自己評価は男女ともに概してネガティブなことがわかる。「友だちが多い」の項目をはじめ、性格的な明るさを示すいくつかの項目においてやや肯定的であるだけで、その他の項目については圧倒的に自信のない生徒が多い。とくに、⑳「勉強がよくできる」や㉑「顔がいい」、㉒「異性から人気がある」といった天性の能力と絡んだ項目は、肯定率も10%内外でしかない。

また、性差の大きな項目をひろってみると、⑮「将来性」や⑯「社会的情報」に関しては、男子の肯定率の方がグンと高く、②「性格的な明るさ」や⑦「芸能界の情報」といった項目で

(図1) 生徒たちの抱く自己像

自信のない、ネガティブな評価が目立つ



は、女子の方が高くなっていることがわかる。

昨年、筆者らは、現代の女子中学生が早くから社会的・職業的達成を断念してしまっている姿を、別の調査レポート(前述『モノグラフ・中学生の世界 vol.8 女子中学生—その心の傾斜—』)において報告した。図1の自己像のプロフィールから浮かんでくる女子中学生像にも、前述「オリかけた女の子たち」の影が見られ

る。「将来、大物になる」とか「社会」に関心を持って積極的にかかわっていくタイプの人間だと自己評価している者は、全体に少ない。中でも、女子は、「社会」に対して、さらに退却的な反応をしている。この点に関しては、職業的達成との関連を中心に第III章でくわしく述べることにしたい。

2. 自己評価と他者からの評価のズレ

担任の先生との遠い距離

自分の内面に目を向け始めた中学生たちの自己像が、意外にネガティブであったのは、見てきたとおりである。しかし、そうした小さな自分を支えてくれる存在、自分を評価してくれる存在を、誰でも無意識に求めるものではないだろうか。「自分のことをわかってほしい」との願いは、とくに青年期の入口にある中学生に、切実なものであろう。そこで生徒たちの周囲について、とくに彼らとかわりの深い人々が、彼らをどう支えているのかを、「他者からの評価の予想」という形で尋ね、自己評価とのズレをみたのが図2である。自己評価と「親・担任の先生・友人からどのように評価されているか」と比較するため、「とても・少しそう思う」と答えた割合を図示した。全体的にみると、他者からの評価の中で、もっともネガティブな評価をしているとみているのが担任の先生からであり、もっともポジティブな評価を予想しているのが親であることがわかる。子どもたちの自己評価そのものも決して明るいものではなかったが、その自己イメージは、担任の先生との関係において、さらに縮小してしまっている。

「友だちが多い」「心がやさしい」をはじめとして、人間味や性格的評価の面では、親・友人とも、自己評価に近いが、それ以上の評価をしているだろうと子どもたちは答えている。

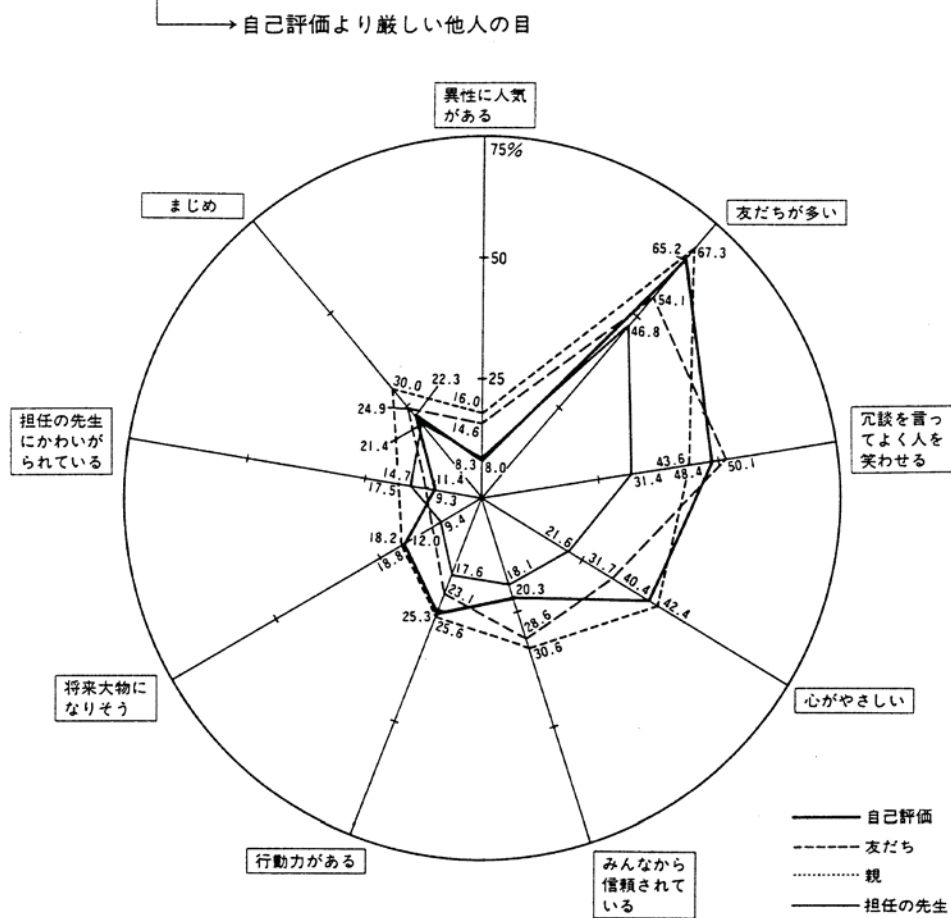
それだけに、それらの項目についての担任の先生からの低い評価の予想が目につく。これは学校生活における担任の先生との心理的距離の遠さ、担任の先生は自分のよさを評価してくれないだろうという自信のなさや不信感が反映された結果であろう。子どもたちにとって、担任の先生は身近な人々の中でもっとも厳しい評価者であり、「自分を認めてくれない存在」であるかのようだ。

それに対して、親は「もっとも自分のよさを認めてくれている存在」である。例えば友人や担任の先生との人間関係については、親の方がややポジティブに評価しており、性格面での評価は、親と子ではほぼ一致している。

両親の庇護の手をふり切って、自己の世界を拡大していく時期にあるはずの子どもたちが、友だちよりも親との心理的距離の方が近く、またより信頼をおいているとは、一体どうしたことだろう。

また中には、親しい者たちからの評価より自分の正体はもっとちっぽけだ、と思っている部分も見られる。「みんなからの信頼」「異性からの人気」「担任の先生からの関心」については、見かけより実際の自分はパッとしないのだと生徒たちは答えている。つまり他人とのかかわりに関して、自信のない様子が見い出され、生徒たちが、周囲とのつながりの浅さを感じとり、不安な気持ちでいる様子が表れている。

(図2) 自己像と他人(親、友だち、担任の先生)の評価



3. こうありたい自分

派手な子は敬遠される

友だちはけっこう多く、冗談を言い合いながら、毎日けっこう楽しくやっている自分だがしかし内心では、学力に自信は持てず、といって容貌やスタイルがいいわけでもない自分——そんな思いの生徒たちの中にも、あこがれの明日、つまりこうありたいという自分の姿はあるに違いない。

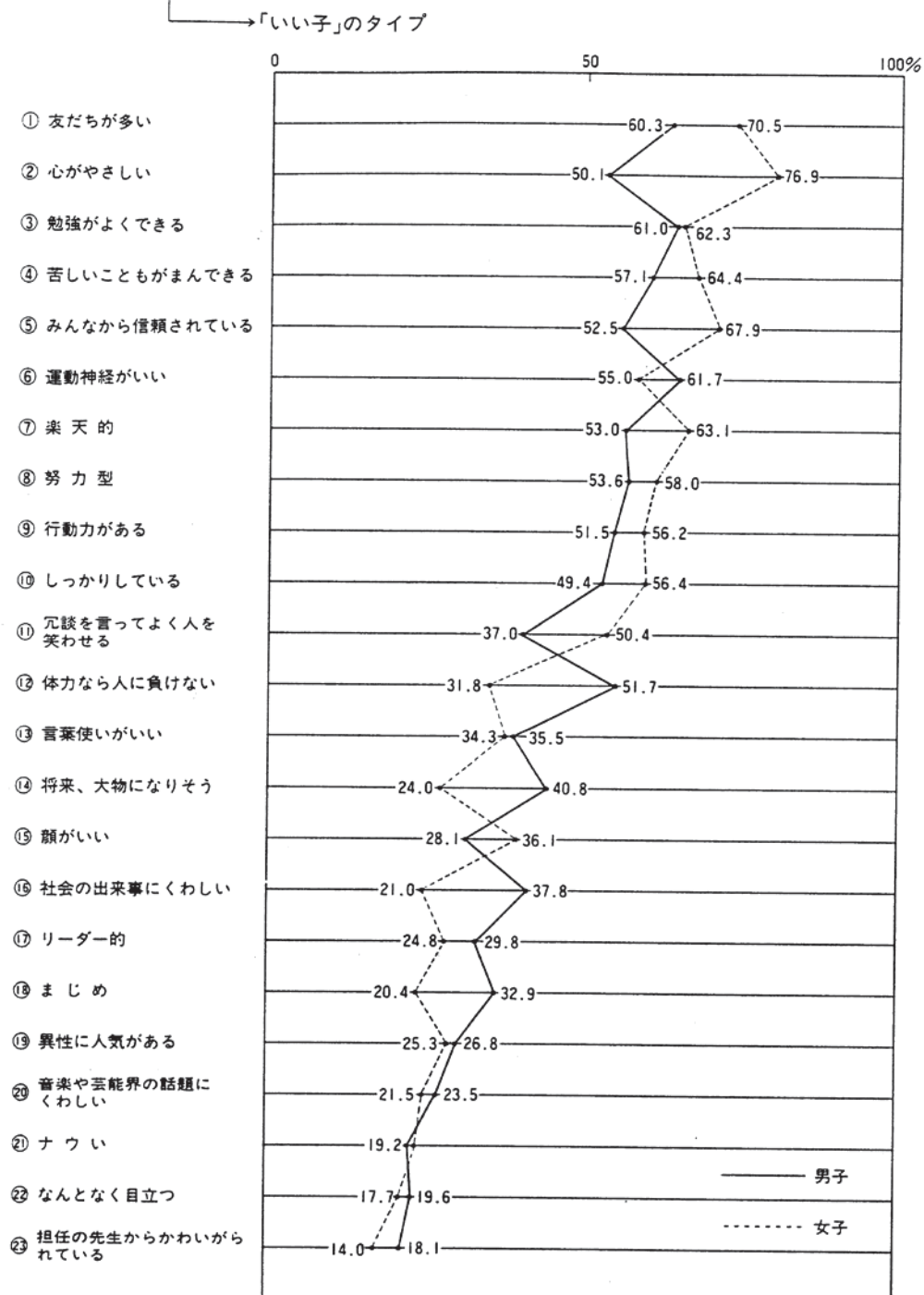
「自分とは何か」を探り、そして「あるべき自分」との統合を図っていく(いわゆるアイデンティティ確立の)プロセスのステップを彼らは今、どんなふう昇りつつあるのら

うか。彼らの描く理想の自己像を明らかにし、志向する価値観の一端をとらえてみよう。

次の図3は、自己像の23項目を用いて、「とてもそうになりたい」から「ぜんぜんそうならない」の4段階で尋ねた結果を肯定率の高い順に男女別に示したものである。

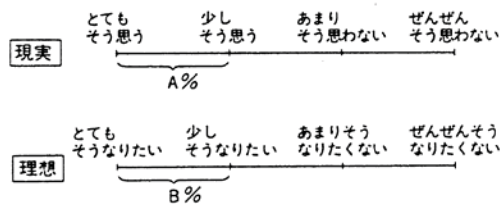
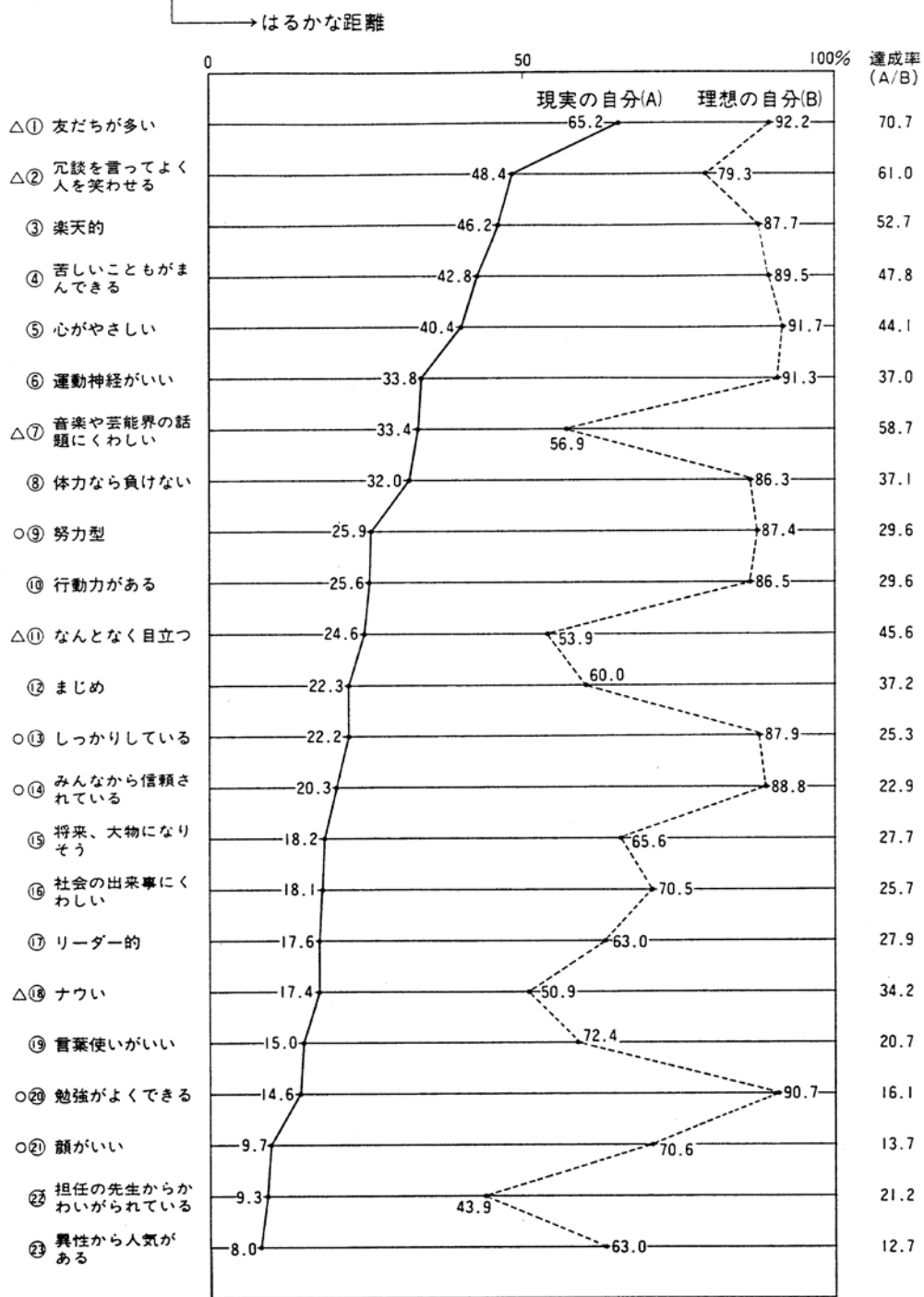
男女ともに、半数以上の子もたちが「とてもそうになりたい」と願っている項目は、「友だちが多い」「勉強ができる」「苦しいこともがまんでできる」に代表される、誰からも親しまれ、セルフコントロールができて、成績もよく、明るい子というイメージである。逆に、肯定率の低い項目は、「先生からかわいがら

(図3) 男子、女子生徒の理想の自己像



*「とてもそうになりたい」の割合

(図4) 現実の自己像と理想の自己像



れる」「なんとなく目立つ」「ナウい」に代表される。自己顕示欲が強く、要領のいい、ちょっと派手なタイプの子というイメージだ。子どもたちのなりたい「自分」には、意外に堅実で「いい子」タイプが望まれている。ただし、「いい子」と言っても、昔の優等生タイプとは違うのがおもしろい。「リーダー的」や「まじめ」に対する人気はかなり下位にある。と言って当世風と言おうか、「派手で目立つ感じ」に対する人気は低いのは意外である。

さてこうした理想の自己と、現実の自己との距離はどうか。それを図4に示してみた。

全体として理想と現実の間には、かなりの距離が見られる。その中でもとくに差の大きい5項目を○印で、差の少なかった項目を△で示した。

この中で一番差が大きかったのは、「勉強がよくできる子」で、91%がそれを望んでい

るのに、現実にはそれを達成している者の割合は15%だから、単純に計算すると、理想の達成率は、16%でしかないという勘定になる。このような算出のしかたをしたのが、図4の右側の数字である。

この数字を使うと、○印、つまり現実と理想の自己の間の差の大きい項目は

- 勉強がよくできる子(16.1%)
- みんなから信頼されている子(22.9%)
- しっかりした子(25.3%)
- 努力型の子(29.6%)
- 顔のいい子(13.7%)
- 異性に人気がある子(12.7%)

となって、いずれも1~3割ぐらいの達成率でしかない。生徒たちの自分に対する不満は、このあたりに一番集まっているとみなせるだろう。

4. 自己像と学業成績

上位と下位の差

さて最後に、話を再び「現実の自己」にもどして、自己像の大きさに一番密接な関連を持つ要因は何か、を見てみることにしよう。結果の詳細は省略するが、現実の自己像にダントツに影響を及ぼしている条件は、生徒の「学業成績」であった。

図5は、学業成績上位の者と下位の者で、その自己像がどうなっているかを見たものだ。ここでは自分の成績を「トップから4、5番ぐらい」と評価している者7%を成績上位群、「うしろの方」と評価している者26%を成績下位群とした。

図が示すように、成績上位群は「自分」に対してポジティブな評価をしており、逆に下位群の自己評価は低い。とくに差の大きな項目は、「勉強ができる」のほかに、「まじめ」「努力型」「しっかりしている」「リーダー的」と人

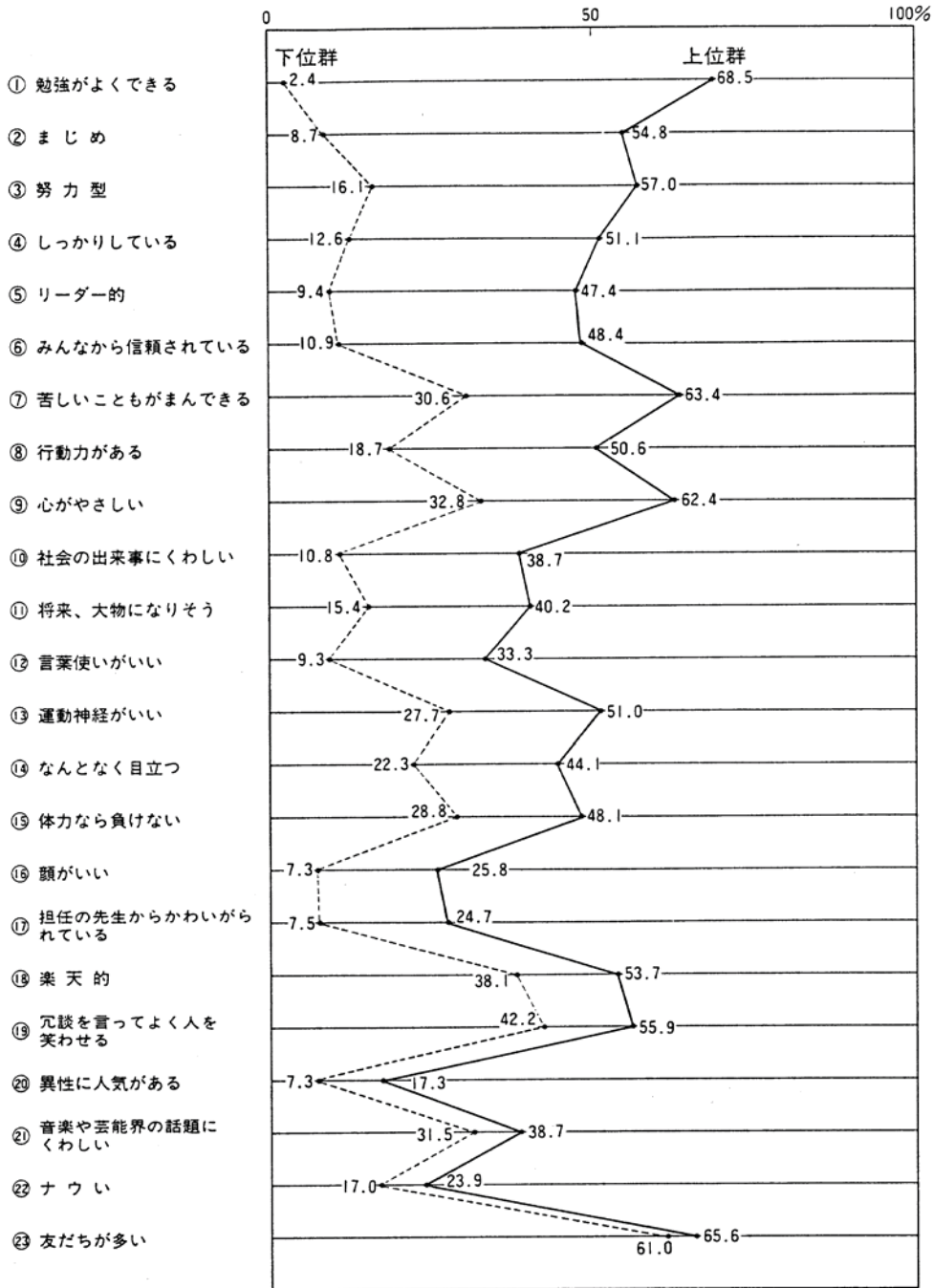
の上に立って積極的にがんばってやる「いい子」の資質が並ぶ。自分を価値ある人間であると受け止める自尊感情は、断然学業成績のよしあしに左右されるものであることが、この図にはっきり表れている。

学業成績が上位の者は、自尊感情が高く、将来の見通しも明るい。やがて社会に進出して、社会的達成をと望む動きも少なくない。そして、それと対称的に、成績下位群の者は、自信を持たず、早くから社会的達成を望まない。いわゆる「オリてしまった子」なりの幸せを追いかけていこうとしているように見える。

子どもが40人いれば、当然1番の者もいれば、どんなに努力しても、ベケの者も出てくる。われわれは、成績の思わしくない子どもたちの中にどうやって十分な自尊感情を育ててやるか、大きくて難しい課題を負わされていると言えるだろう。

(図5) 成績上位群と下位群の自己像の比較

→成績に大きく左右される自尊感情



ぜんぜん
そう思わない

あまり
そう思わない

少し
そう思う

とても
そう思う

％

上位群				下位群	
3.1	4.1	9.3	41.6	16.3	25.6
トップの方	4-5番	10番ぐらい	まん中ぐらい	中の下ぐらい	うしろの方 (%)

※学業成績の自己評価

第II章 子どもたちの現在と過去



1. 今、打ち込んでいるもの

よく遊び、ほどほどに学ぶ

前章では、生徒たちの自己像を分析し、主に男子女子、それぞれの姿を大まかにとらえてみた。この章では、そんな彼らが現在どのような生活を送っているのか、自己像の背景としての日常生活を追ってみることにしよう。

図6は、彼らの平日の生活ぶりを、部活動、テレビ視聴、家庭学習、睡眠時間の四つの活動を柱として見ようとしたものである。

平均的な生活ぶりは、男子の場合、

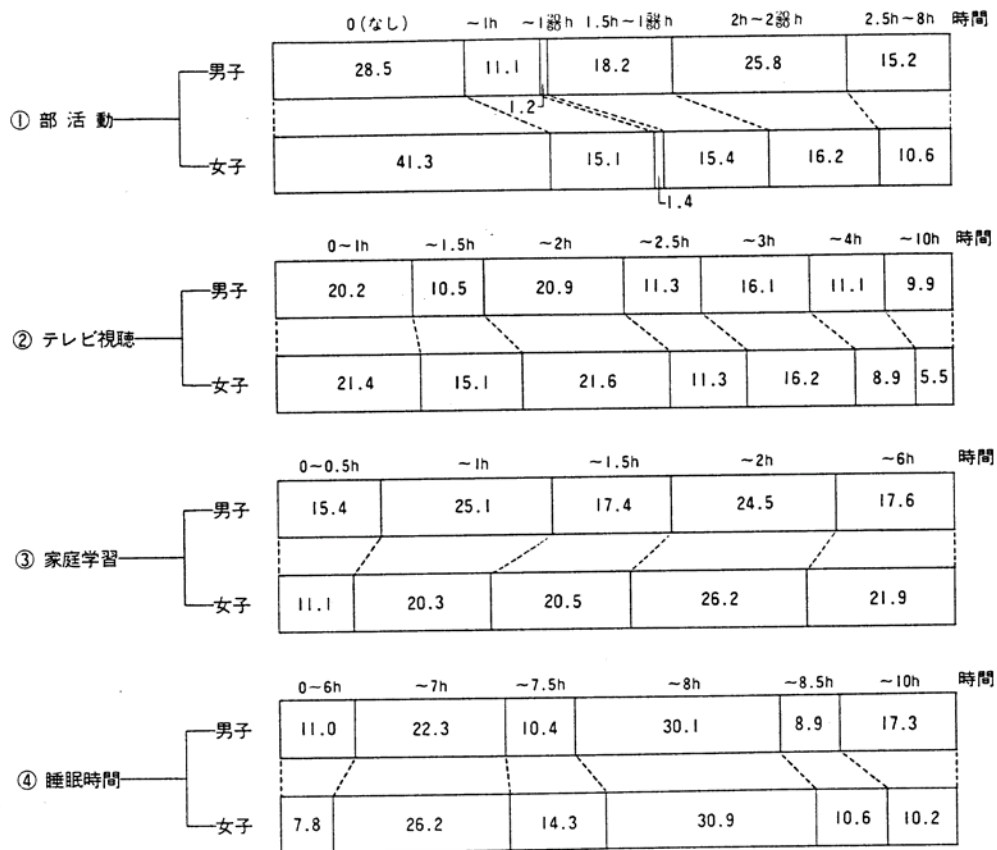
—— 平日の生活(男子平均) ——

8:00am ~ 2:30pm	学校での授業
3:00pm ~ 5:00pm	部活動 (2時間)
6:00pm ~ 8:30pm	テレビ視聴(2時間30分)
8:30pm ~ 10:00pm	家庭学習 (1時間30分)
11:00pm ~ 7:00am	睡眠 (8時間)

というところだろうか。女子の場合もほぼ同様であるが、部活動に費す時間がやや減少し、家庭学習の時間が少し長めになっている。し

(図6) 平日の生活時間

→部活動とテレビ視聴、そして勉強と生活のペースは個人差が大きい (%)



かし、部活動にしろテレビ視聴にしろ、それに費す時間にはかなりの個人差が見られる。

放課後5時間も6時間も部活動に打ち込んでいる者もいれば、その時間を勉強に費している者もいる。テレビ視聴が4時間以上に及ぶ者もいる。そうした中で、今、中学生たちは何にもっとも打ち込んでいるのだろうか。勉強・部活動・遊びや趣味の3項目についてその割合を尋ねてみた(図7)。

勉強については、自信を持って「とてもよくやっている」と答えている者は4%に満たない。それでも4割にのぼる者が「わりとやっている」と答えている。部活動では、男子の方が女子よりやや一生懸命であり、26%を超える者が「とても打ち込んで」やっている。また、

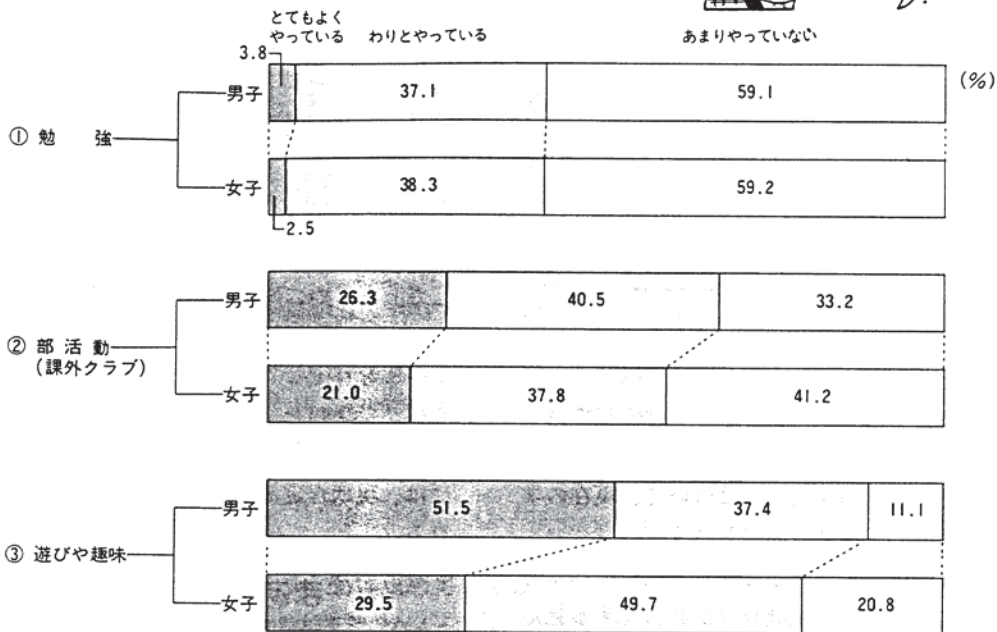
遊びや趣味でも、男子の取り組み方は熱心である。言い換えれば、男子の方が女子に比べ、夢中になれる対象を持ち合わせていることになる。概して、中学生は「よく遊び、よく部活動し、ほどほどに学んでいる」というところであろう。

図8には、部活動の状況についてのデータをまとめてみた。運動部入部者6割、文化部入部者1割、入っていない者3割といった内訳で、図はそれぞれ熱心に参加している者とさぼりぎみの者とに分けて掲げている。運動部の3分の2、文化部では入部者の半数ぐらゐが熱心な参加者となっている。

部活動の活動日数はまちまちであるが、週に5日以上部活動に費している者が7割にも

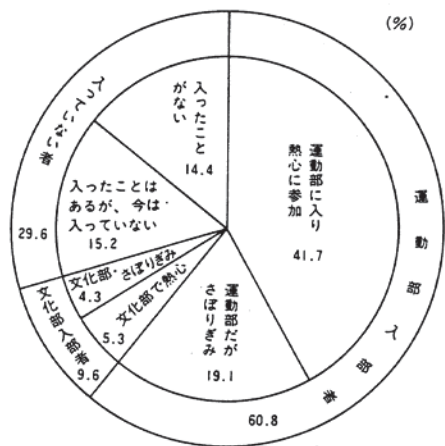
(図7) 現在、一生懸命やっているもの

→男子の方が夢中になれる対象を持っている



(図8) 部活動の状況

→部活動に、学習にとけこう多忙なスケジュール



<部活動の活動日数>

週に	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日
	5.6	4.2	10.7	7.9	28.3	27.2	16.1

<通塾日数・おけいごごと>

項目	回数 (%)				
	1回	2回	3回	4回	5回以上
① 学習塾・英語塾など	49.2	6.8	16.8	14.6	8.8
② おけいごごと	75.7	13.9	4.8	5.6	

達している。中学生の生活の中で、部活動の占める割合の大きさが改めて実感される。その他、放課後、学習塾に行っている者が半数、おけいごとに行っている者が4分の1とな

っている。

授業、部活動、塾通い、家庭学習と多忙な生活の中で、けっこう息抜きもし、遊んでいるというのが中学生の姿のようである。

2. 学校生活と友だち

校内暴力の可能性

校内暴力の嵐が中学校で吹き荒れている現在、その生活のほとんどを学校で過ごす生徒たちは、学校や学校生活をどう評価しているのだろうか。友人関係・校内暴力・非行化の見通し・学校の規則などについて、現在の学校生活の様子をまとめておこう。

図9には、今通学している学校で校内暴力が起こる見込みと生徒自身が非行化する見込みについて彼らの見通しを掲げた。現在、自分の学校を校内暴力が起こっている学校とみている者は3%とわずかなが、生徒たちの目から見て、「起こる可能性があるだろう」と予想する割合は66%にもものぼっている。また、自分自身が非行化する見込みについては、「可能性あり」が26%である。なんとなく不安定な学校の空気と、自分の中でもいつ爆発するかわからない不満の種を持ち、危険を感じながら過ごしている者が、4分の1はいることになる。校内暴力も自分の非行化もまったく起こりそうにないことを自信を持って答えている者はそれぞれ3割ほどでしかない。

さて、今日の中学校における生徒たちの反乱は、進学競争の過熱によるゆがみと管理・支配の強化によるところが大きいと言われる。荒れる危険性を秘めた生徒たちが学校の規則による締めつけをどう受け止めているか気になるところである。図10は、制服と頭髮の規則を取りあげ、彼らの受け止め方を尋ねた結果である。制服に関しては、男子の4割、女子の6割が「あった方がいい」と肯定的な意見を持っている。こうした傾向は、高校の制服

についても同様である。それぞれが「自分らしさ」を求め、確立していくこの時期に、多くの者が、没個性のシンボルとでもいうような制服を肯定している。ヘアスタイルさえも細かな規制をし、学校の支配に対して、(自由を求める声もないわけではないが) 全体的には、現状肯定派が少なくないのには驚かされる。

まあまあの適応

さて、最後に、学校生活に関する意識を見ても、われわれが予想していたよりも生徒の反応は全体としてかなり肯定的である。

まず、図11-①が示すように、半数以上の者が「学校は楽しい」と答えている。好きな異性と呼べるほどの対象はまだとくにいないが、仲のいい友だちは大勢いて、恋にあこがれながら、毎日をそれなりに過ごしているといったところなのだろうか。図12に見られる友人関係の評価も大いに「楽しさ」に関連しているに違いない。図11-①からは、彼らのほぼ9割近くが現在の中学校生活になんとか適応している様子がうかがわれる。

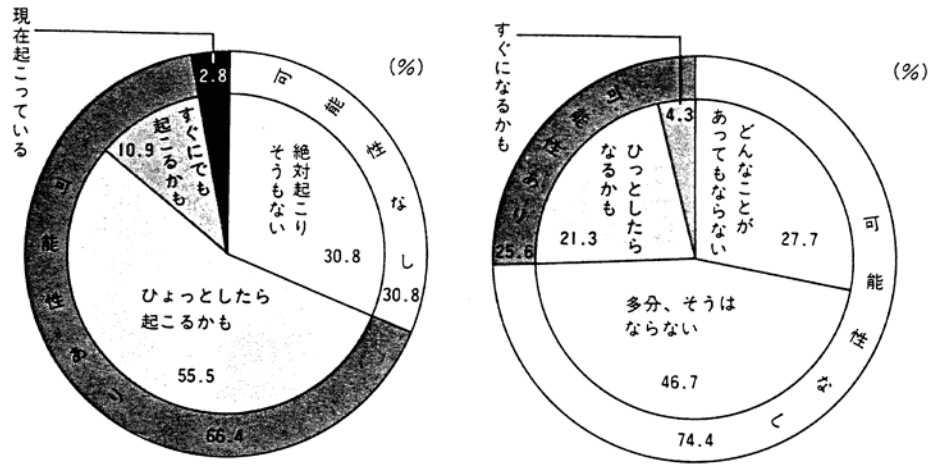
こうした学校へのまあまあの適応ぶりは、表1にも表れている。現在の彼らの心情を尋ねた項目の一部であるが「先生に関心を持たれていない」「自分の気持ちをわかってくれる友だちがいなくてさびしい」「今日は学校へ行きたくない」と「わりと・いつも」思っている者は、男子で22%、12%、16%、女子で26%、11%、14%でしかない。もっともこの20%前後の者の存在を、決して見過ごしてはならないであろうが。

(図9) 校内暴力と自分の非行化の可能性

→校内暴力の可能性はあるが、まあ自分は非行化しないだろう

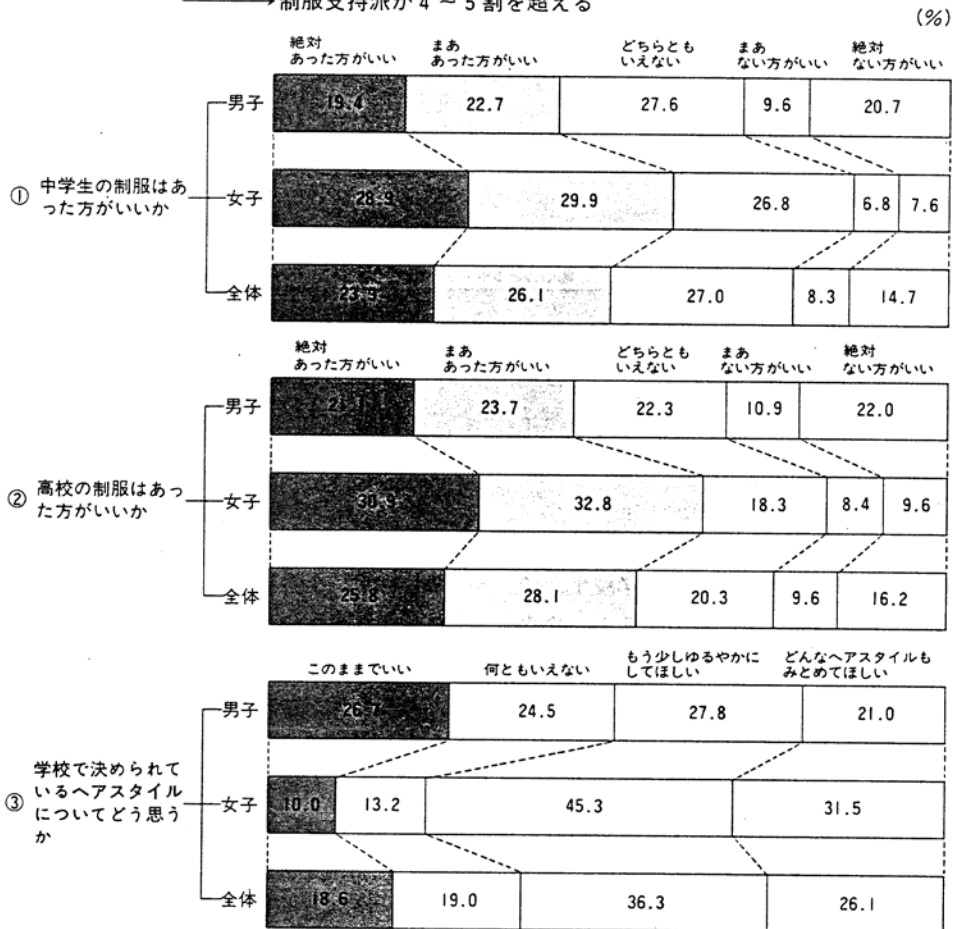
A) 校内暴力が起こる見込み

B) 非行生徒になる見込み

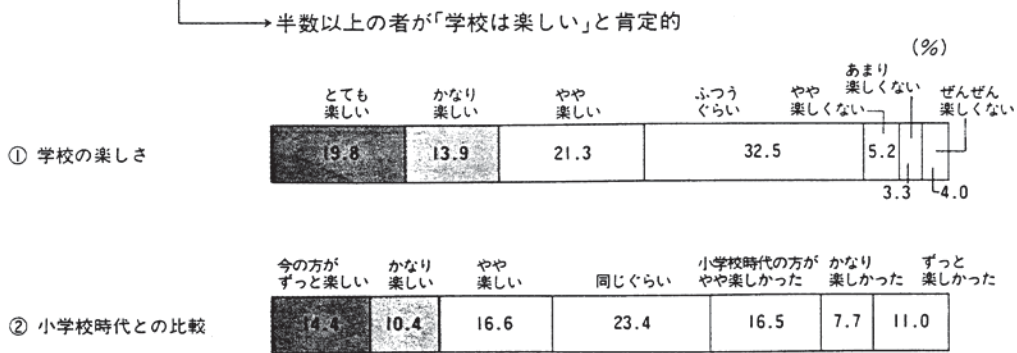


(図10) 学校の規則をどう受け止めているか

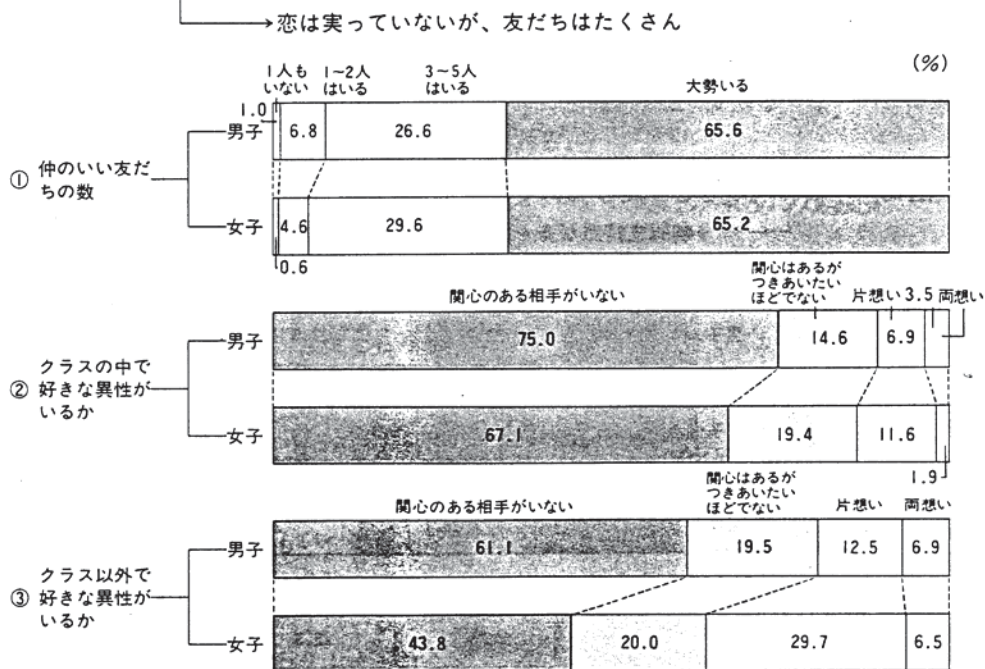
→制服支持派が4～5割を超える



(図11) 現在の学校生活の楽しさ



(図12) 現在の友人関係・異性関係



このように彼らから「まあまあ楽しく、適応もしている」と答えられている学校生活ではあるが、小学校時代と比較させると、やや違ったトーンも出てくる。

学校での生活が、小学校時代の生活と比べ楽しいかどうかを尋ねると、「今の方が楽しい」と答える者が4割、「小学校の方が楽しかった」と答える者も4割といった結果である(図11-②)。図は省略するが、どちらかと

言うと「まじめでいい子」の方が、「今はまあ楽しいが、小学校時代の方がもっと楽しかった」と答え、ややツツパっているタイプの方が、「今の方が楽しい」と答える傾向にある。

ともあれ、われわれにはそうバラ色とも思えない現在の中学校生活を「楽しい」と肯定する彼らは、一体どんな子ども時代を過ごしてきたのだろう。次に、彼らの持っている個人的なヒストリーを探ってみることにしよう。

(表1) 自分をめぐって(自分に関する感情)

→自己疎外感や不適応感を抱く者もいる

項目	尺度	(%)			
		いつも、わりと そう思っている	少しそう思っている	あまり、ぜんぜん そう思わない	
私は先生から関心を持たれて いない	男子	10.7 — 11.7 22.4	20.0	41.7 — 15.9 57.6	
	女子	10.8 — 15.1 25.9	21.4	41.0 — 11.7 52.7	
自分の気持ちをわかってくれる 友だちがいなくてさびしい	男子	6.2 — 5.6 11.8	11.0	39.2 — 38.0 77.2	
	女子	4.7 — 5.8 10.5	14.3	33.5 — 41.7 75.2	
項目	尺度	いつも、わりとよく そう思っている	何度かある	1-2度 ある	1度も ない
今日は学校へ行きたくない	男子	8.4 — 8.0 16.4	34.9	27.8 — 20.9 48.7	
	女子	5.3 — 8.3 13.6	40.0	32.5 — 13.9 46.4	

3. 生徒たちの「自分史」

よく遊び、よくテレビを見た

人は誰でも自分に関する小さな歴史を持っている。これを「自分史」とでも名づけてみよう。さかのぼることができる限り幼い年齢からの意識の連続性の中で、記憶しているかすかすの出来事の断片。そして親たちから聞かされた自分についてのエピソード。そしていつの間にか形作られた「自分」のイメージ。自分史は、いわばそうしたものから成り立っている。

その自分史の色調や彩度は、現在の自分はむろん、これから先の自分の人生を予想するのに、大きな意味を持ってくることだろう。では本サンプルの中学生たちの「自分史」は、どんなものか、探ってみることにしよう。

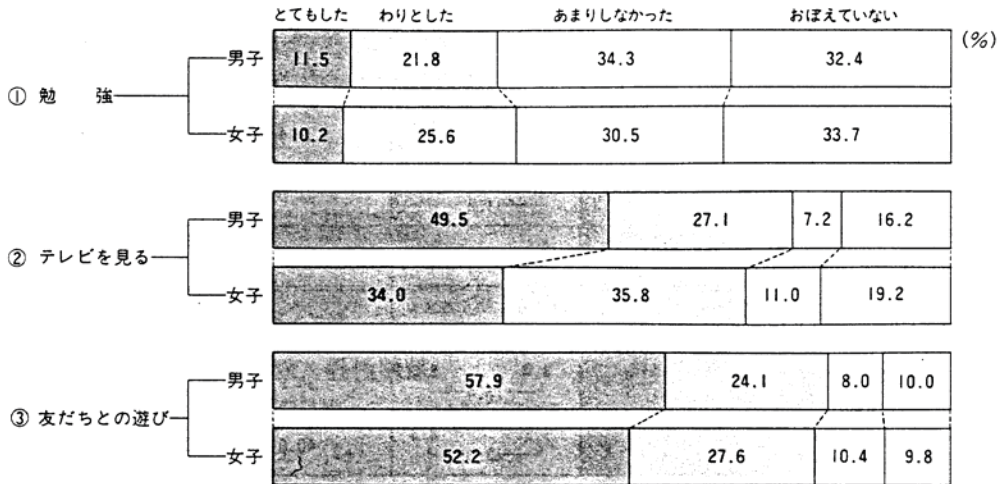
まず小学1・2年の頃の彼らはどうだったか。図13に掲げたように、「勉強」「テレビ」「友だちとの遊び」に分けて思い出させてみる

と、「よくテレビを見て、よく友だちと遊んだ」が、残念ながら「勉強はあまり一生懸命にしてこなかった」のような「自分史」がまず浮かび上がってくる。そしてそうした把握のしかたは、ごく最近まで連続性を持つものようで、図14に示した小学5・6年の頃についても、ほぼ同様の数字が見い出される。

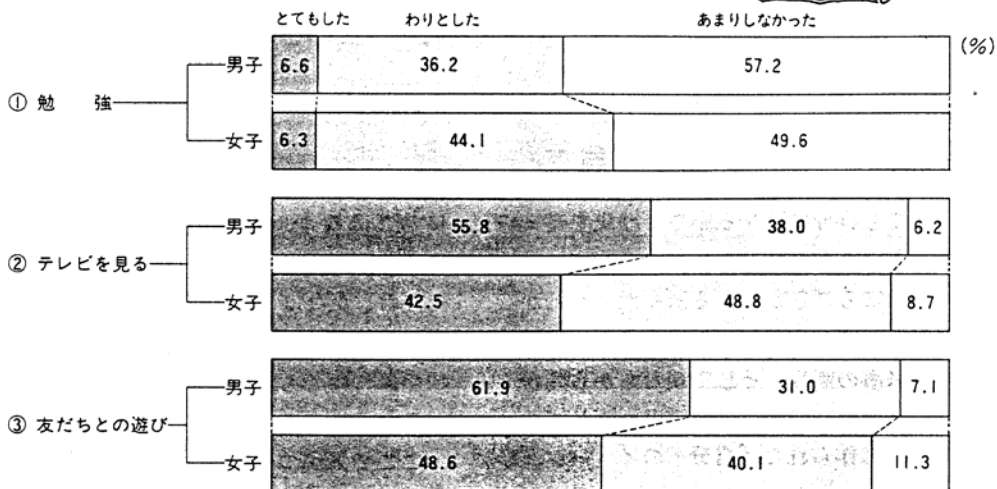
ここで気がつくのは、「友だちと遊んだ思い出」と匹敵するほどに、「よくテレビを見ていた自分」という記憶で構成される彼らの「自分史」だ。テレビが現代人の生活の中にゆるぎない地位を占めていることを否定する人はいないだろうが、こうした「自分史」の中にまで、これほどの重みで登場してくる様子を見ると、子どもとテレビとのつきあいの深さを改めて確認させられる。

さらに異和感があったのは、子どもの頃「友だちとよく遊んだ自分」という過去のふり返

(図13) 小学1・2年の頃、一生懸命だったもの
 →よく遊び、よくテレビを見た頃



(図14) 小学5・6年の頃、一生懸命だったもの
 →小学1・2年の頃よりは、ちょっとは勉強も



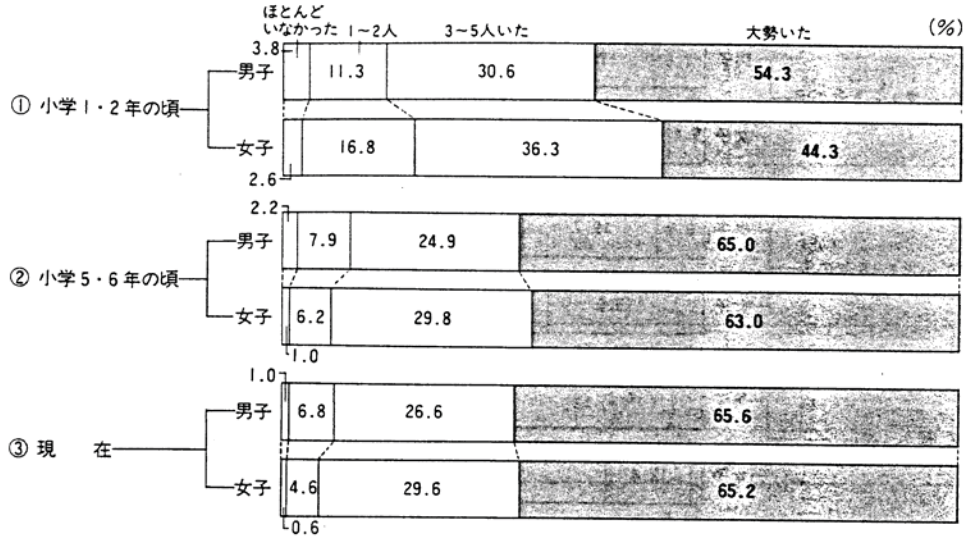
り方である。今の子どもたちの遊び、とくに仲間遊びの貧しさは、質量ともに目をおおいたくなるもののようにも思うのだが、旧世代のわれわれのように、豊かに遊んだ「子ども時代」を持たない世代の中学生たちは、自分を「よく遊んだ」子ども時代の持ち主として把握できるものらしい。とくに女子と比べて男

子にその傾向が大きい。

そのことは図15にも表れていて、友だちの数については、どの時期も「仲よしが大勢いた」とする者が半分以上。現在では、65%が「仲よしが大勢いる」と答え、ほとんどいないと答えた者は1%に満たない。

(図15) 仲よしの友だちの人数

→「友だちは大勢」と答える者が学年を追うにつれて増えてきている



勉強をめぐって

このように一見天気晴朗で、恵まれた子ども時代を過ごしてきたように思える中学生たちの中にも、やはり暗点はある。図16に示したように、勉強の得意さ(学力)をめぐっての「自分史」である。全体に、小さい頃ほど勉強が得意だったと答える者が多い。つまり自分の成績が不振傾向をたどっているという感じを持つ者が多い。

男子を例にとれば、「中の下以下」の成績の者は、小学1・2年から順次、

自分の成績は「中の下以下」だ(だった)と思っている割合(男子)

- 26.0% (小学1・2年)
- 30.7% (小学5・6年)
- 43.5% (現在)

という大きな数字の増加を示している。女子も同様に、

自分の成績は「中の下以下」だ(だった)と思っている割合(女子)

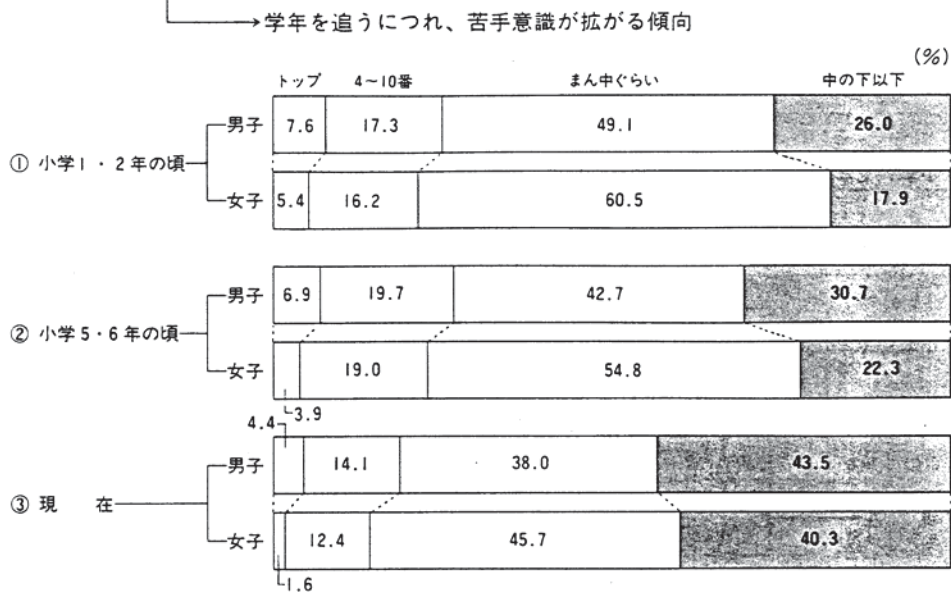
- 17.9% (小学1・2年)
- 22.3% (小学5・6年)
- 40.3% (現在)

となっている。

この点をさらに追ってみよう。表2は、小学1・2年から現在までの成績レベルを、トップから10番ぐらまで、中位、中以下の三つに分けて、三つの時期(小学1・2年、小学5・6年、現在)の変化を追ってみたものである。表中の上昇群とは、中→上、下→中、下→上の三つのケース。下降群とは上→中、中→下、上→下の経過をたどったケースを含んだものである。

1,311人の生徒のうち、成績上昇群は121人(9.2%)、不変群が505人(38.5%)、下降群は上昇群より多くて201人(15.3%)となっている(その他とは、上→下→中とか、下→中→

(図16) 成績に見る得意意識



下のような谷型または山型の変化を示した者で、これが37.0%となる)。

現在の自分を把握しよう、または将来への展望を見出そうとする際に、「だんだんダメになる自分」「いつも変わらない自分」「だんだんよくなる自分」の三つのうち、いずれが、十分なセルフ・エスティーム（自己価値観、自己受容観）の確立に寄与するかは、言うまでもないだろう。

その将来展望

この三群(計63%)の生活態度や心情の一端をグループごとに比較してみようとして作成したのが表3である。左半分をまず見よう。三つのグループの間には、明らかにかなりの態度や意識の差が見出される。例に「あなたは将来ひょっとしたら自分も非行をするようになるかも知れないと思いませんか」ととってみると、絶対も含めて「多分そうならないだろう」と答えている者は、下降群では67%だが、不変群では76%、上昇群では85%と、順次増加している。「だんだん成績の上昇し

てきた自分」というイメージは、「だから将来も、成績以外の領域でも、だんだん上昇していく自分」という確信へとつながるのだろう。

次に「あなたは、同じ学年の中でどんな人ですか」について見てみると、「まじめな自分」の例では、下降群にはそのような自己イメージを持つ者が14%しかいないのに、不変群では21%、上昇群では38%にも達している。

二つの例をひいたが、全体として、下降群の自己像や将来展望が一番暗く、次いで不変群、一番明るいのが上昇群、という傾向が見出される。当然と言えば当然の結果ではあるが、成績を中心とした「自分史」の重みが、ずっしりと胸にこたえてくる。このような傾向をもう少し追ってみよう。あらゆるデータをすべて掲げるようはないので、自己像の部分だけを取り出して、上昇群と下降群の差を見たのが表4である。

これから見出されるのは、下降群が比較的自信を持っているのは、「ナウい、異性から人気がある、楽天的、冗談をよく言う、友

(表2) 成績の推移

→だんだんよくなる子・悪くなる子

人(%)

		男 子	女 子	合 計
下 降 群		107 (15.7)	94 (14.9)	201 (15.3)
不 変 群	上	70	39	109
	中	126	104	230
	下	101	65	166
	計	297 (43.5)	208 (33.0)	505 (38.5)
上 昇 群		58 (8.5)	63 (10.0)	121 (9.2)
七 の 他		220 (32.3)	264 (42.1)	484 (37.0)
合 計		682 (100.0)	629 (100.0)	1311 (100.0)

だちが多い」などの「おもしろい子」としての自分であり、逆に上昇群では「成績がいい、まじめな、担任の先生から好かれる、努力型、リーダー的な、しっかりした」のような、「優等性」としての自分であることがわかる。

このように生徒一人ひとりが持っている「自分史」の内容に接近してみると、とりあえず見い出されるのは、成績を中心に「だんだんよくなる」自分、または、表4の上昇群に掲

げたような「いつも優秀な」自分、という自己イメージを持ちつづけることの大切さかも知れない。しかしこの条件をすべての生徒が備えることは、むろんできるはずもない。”とすればわれわれは、どうしたらそれ以外の領域で、生徒のセルフ・エスティームを確立し、彼らに明るい未来展望を築かせることができるか、それが課題と言えそうである。

(表3) グループ別成績の推移

→自己像や将来展望が明るいのは上昇群、暗いのは下降群

	(%)			(%)		
	下 降	不 変	上 昇	不 変 群 内 訳		
				上→上	中→中	下→下
部活をととも・わりとよくやっている	65.4	65.5	58.3	68.7	71.7	50.8
勉強をととも・わりとよくしている	31.3	42.2	56.7	62.4	44.9	23.5
自分は非行化(絶対・多分)しない	66.7	76.0	85.2	78.0	80.3	67.0
有名高校がいい高校に入れそう	6.5	17.2	31.2	55.1	10.8	3.6
大学へ進学する	26.6	40.5	57.9	76.9	42.3	13.4
専門・セミ専門職につきたい	12.9	14.3	35.3	29.4	13.5	5.4
タレント等になりたい	12.2	9.1	6.8	10.7	10.0	6.3
教職志望	6.5	9.8	11.4	22.7	9.0	2.7
中学の制服は絶対賛成	20.0	25.6	31.7	26.6	26.0	24.2
まじめな自分(とても・少し)	14.4	21.0	38.0	46.6	19.1	7.2
頭を使う仕事に向く自分	23.7	35.9	59.2	67.6	34.4	17.1
技術・知識のいる難しい仕事に向く自分	36.7	38.8	53.3	67.6	35.9	25.0
苦しさに耐えられる人にとともなりたい	58.5	58.2	68.9	66.1	63.7	43.3
リーダーにとともなりたい	23.4	26.4	36.7	39.4	24.1	24.8

(表4) 自己像と成績(上昇傾向と下降傾向)

→上昇群は「優等生」、下降群は「おもしろい子」の自己像を持つ

(%)

自己像	比*	下降群	上昇群
ナウい	0.64	21.9**	14.0**
異性に人気がある	0.67	7.5	5.0
楽天的	0.84	46.0	38.8
冗談をよく言う	0.91	52.0	47.1
友だちが多い	0.93	63.1	58.7
運動神経がいい	1.03	32.5	33.6
家族の仲がいい	1.05	64.8	67.8
家族の教養がある	1.07	52.0	55.4
体力がある	1.08	33.4	36.2
金持ち	1.09	15.5	16.5
がまん強い	1.10	43.8	48.3
行動力がある	1.11	27.5	30.6
やさしい	1.19	38.7	45.9
芸能界の話題にくわしい	1.20	32.4	38.8
目立つ	1.20	23.4	28.1
大物になりそう	1.27	18.3	23.2
顔がいい	1.32	7.5	9.9
言葉使いがいい	1.37	13.9	19.0
信頼されている	1.41	17.0	24.0
社会にくわしい	1.47	14.0	20.6
しっかりしている	1.58	20.9	33.1
リーダー的	1.72	14.4	24.8
努力型	2.15	18.5	39.7
担任の先生から好感	2.33	7.0	16.3
まじめ	2.64	14.4	38.0
勉強がよくできる	10.05	4.0	40.2

* 下降群の「とてもそう思う」を1とした時の上昇群の指数

** 「とてもそう思う」の%